プログレス

川島(仕事がうまくいかず、怒られる日々)
美好(川島の同期。佐倉の上司)
司(川島の上司。よく叱るが成長に期待している)
春日(公園に遊びに来る女の子。14歳)
佐倉(美好の部下。仕事熱心)

川「すみません」
司「すみませんじゃないでしょ・・・何回同じこと繰り返すの？」
川「すみません。」
司「あのね、すみませんって謝って、その場では反省してても次につなげなきゃ意味ないんだよ？」
川「ハイ。」
司「言っちゃ悪いけど、君の後輩の佐倉の方がよっぽど動いてくれるよ」
川「・・・」
司「これから忙しくなるの、分かってるでしょ？」
川「ハイ」
司「しっかりやって。君にやってもらわないと困るんだ。頼んだよ」
川「ハイ。すみませんでした」
司、去っていく
川「はぁ・・・」
　話しながら入ってくる二人
美「いいか？そこが甘いんだよ。時間に余裕を作ってこっちに時間を使わないと」
佐「ハイ。わかりました」
　バインダーにメモしている
美「じゃあ、頼んだよ」
佐「ハイ」
美「おー、川島」
川「おう、お疲れさん」
美「何、また怒られてたの？」
川「まあ、そんなとこだね」
佐「お疲れ様です」
川「ああ、おつかれー」
美「しっかし、もはや名物だな、ははは」
川「はははじゃないよ。」
佐「確かによく見かけますね」
川「佐倉、俺の事馬鹿にしてるだろ」
佐「いや、そういうつもりで言ったんじゃないんです！すみません」
川「冗談だよ、俺の専売特許は怒られること。怒ることじゃないよ・・・」
美「これから昼なの？」
川「まぁ、そうだよ」
美「じゃあ一緒にどう？これから佐倉と食べに行くところだったから。」
川「いや、俺はいいよ」
佐「先輩、行かないんですか？」
川「そりゃあんだけ怒られたら食欲もなくなるって。」
美「あんまり重たく受け止めない方がいいよ。司さん、説教大好きだから。」
川「あー。向いてねえのかなー。佐倉の方がよっぽど使えるってさ。」
出「えっと・・・」
川「ごめん、気、つかわせちゃったね。じゃあ俺はドロンしますんで」
　去ってく
美「川島、相当くらってるね」
佐「最近は特にって感じです」
美「やっとウチの会社も軌道に乗ってきたからね、これから忙しくなるよ」
佐「大きなイベントもこれから控えてますし」
美「あいつもあいつだけどねー」
佐「川島先輩ですか？」
美「うん。見てて思ったんだけどさ、アイツ、次につなげる努力をしてないんだよ」
佐「向上心、ですか・・・」
美「そうそれ。そういう点だとそれ、アイツも見習うべきかもね」
　バインダーを指さす
佐「コレは・・・人にみせるようなものじゃないですよ」

川島、財布を取りに戻ってくる

美「佐倉の方よっぽど使えるってさ」

佐「それ止めてくださいよ!さっきだってすごく気まずかったんですから。」

美「上司の私としては鼻が高いけどさ、このままだとアイツ、部署移動になるかもね・・・」

佐「先輩の同期なんですよね?」

美「そうだよ。言っちゃ悪いけど、確かにむいてないのかもなぁ」

川「・・・」

美「お、休憩時間なくなっちゃうね、行こうか」

佐「あ、はい」

二人去っていく

【公園】

川「はぁ・・・」

川「やっぱ俺むいてないんだなー」

川「部署移動かぁ・・・そうなったらいよいよ転職カナ、はは」

女の子(春日)が入ってくる

春「おじさん、何してるの?」

川「おじさん?おじさん・・・ああ、おじさんね。何してると思う?」

春「平日の昼間から公園にいるから、何もしてない人?」

川「うぐっ。残念、おじさんは昼休憩中だから、まだ無職じゃないんですー」

春「本当?ネクタイだってゆるゆるだしスーツも似合ってないし家族に仕事だって嘘ついて」

川「まってまって、なんでそこまで疑うの?・・・君にいいこと教えてあげる、ネクタイをするのには二つ理由があるんだ」

春「りゆう?」

川「そう、一つはネクタイを締める時に気を引き締める事」

春「もう一つは?」

川「ネクタイをめる時に、気を緩める為。だからおじさんは今気を緩めているんだよ」

春「・・・へんなおじさん」

川「・・・君こそこんな時間に。学校は?」

春「今日は・・・開校記念日だから」

川「そっか・・・あのさ、おじさんの立場からいうのも変だけどさ、知らないおじさんに声かけるのはあまり・・・ね?変なおじさんだったら大変だし」

春「おじさんも変なおじさんだよ」

川「おじさんも変なおじさんだけど、おじさんと違うジャンルの変なおじさんだったら大変じゃない?」

春「大丈夫だよ。ホラ」

川「ああ、防犯ブザーね・・・」

春「それに、怪しい人がいたら先に挨拶しなさいって先生が」

川「なるほど!それで声かけたのか!ウン、不愉快不愉快!」

春「違うよ、おじさん疲れてるみたいだ。たし、話聞いてあげようとおもってさ」

川「そっか、やさしいんだね。・・・でも、君には少しむずかしい話だと思うからやめとくよ」

春「そっか。おじさんはさ」

川「あのちょっとまって、おじさんね、まだ27歳な訳。つまり何が言いたいか分かる?」

春「おじさんじゃなくて、おにいさん?」

川「そう!その通り、ごめんね、もっと早くに訂正してあげればよかったね」

春「27歳はおじさんだよ」

川「え、そうなの?今の子にとって27つておじさんなの?」

春「うん」

ミ「ショック・・・君はいくつなの?」

都「私?私はね」

川「待った、当てようか」

春「うん」

川「・・・15才!どう?」

春「残念!14でした!」

川「おしい!・・・ってことは中学生か、

部活とかは？」
春「バトミントン」
川「おじさんは演劇部だったんだ」
春「演劇？」
川「といっても高校のころだけど」
春「中学は？」
川「陸上部の幽霊部員」
春「ふーん」
川「学生の頃見た映画の俳優さんにあこがれてね。学校は楽しい？」
春「・・・うん」
川「そっかあ、いいなー俺ももう一度子供に戻りたいなぁ。あの頃は明日の事なんか考えないで毎日が楽しかったなぁ」
春「おじさんは？」
川「おじさん？」
春「おじさんは毎日たのしい？」
川「俺か・・・」
春「私は早く大人になりたいなぁー。だって働いたらお金もらえるし、そのお金自分で使えるしそれに、周りも大人だから、バカな奴はいないし・・・それに！車だって乗りたいし、お酒も飲んでみたいなー」
川「・・・」
春「大人の方が絶対楽しいよ。いいなー、早くなりたいなー」
川「大人なんて楽しいもんじゃないよ」
春「え？」
川「毎日毎日働いて、そりゃお金はもらえるけど、そんなの微々たるものだし、いやな上司に頭さげて、出来ない仕事まわされて、バカな大人だっていっぱいいる・・・車だって買うにはお金がかかるし、酒なんて楽しく飲める時の方が少ないし。大人になったからって」
　春日防犯ブザーを鳴らす
川「ちょっ、何で！？何してんの！人来ちゃうから止めてってば！」
川「落ち着いて、ね？どうしたのさ。あ、なんでもないです！本当に！」
春「おじさんズルいよ！」
川「ズルい？」
春「私は・・・子供は毎日が楽しいだけって決めつけて、自分は毎日つらいだけでいい事なんかないって、ズルいよ・・・大人になったら何か変わると思ったのに！」
川「ごめんごめん、そんなに怒るとは・・・でも、無責任に希望を与えちゃ悪いかと」
　ブザーをチラつかせる春日
川「待って待ってごめん。水戸黄門かよ・・・」
春「大人になってもつらい事だけなの？」
川「そんなことない、つらい事だけじゃない」
春「本当？」
川「ただ・・・ごめんやっぱり薄っぺらいこと言えないよ・・・」
春「・・・」
川「・・・そろそろ戻らなくちゃ」
春「・・・私も帰る」
　去っていく春日
【会社】
司「ねえ、朝言ったばっかりなのになんでできないの？」
川「・・・すみません」
司「何がいけないのかちゃんと考えなって。何度も何度も同じこと言わせないでよ」
川「ハイ」
司「・・・本当はこんなこと言いたくないけど、向いてないんじゃない？」
川「・・・」
司「基本から見直して」
川「ハイ」
司「まあ、もう期待してないけど」
　司去っていく
川「ホラ・・・大人なんていい事ないだろ・・・？」
美「おぉ、お疲れ」
川「お疲れ・・・俺もうだめだわ・・・」
美「まあそういわないでさ・・・」

川「もう無理だろ・・・こんなに毎日怒られてさ」
佐「先輩、コーヒー買って来ました。」
美「お、ありがと。どう？」
川「いい。佐倉はいつ入社したんだっけ」
佐「えっと・・・今年で2年目です」
川「仕事はどう？」
佐「先輩が丁寧に教えてくれますし、すこしずつ進歩してると思います」
川「そっか、俺も上司が悪かったのかな」
川「基本からやり直せってさ。出だしが悪かったんだよきっと。もっとちゃんと仕事を教えてくれる上司だったら」
美「それは違うでしょ・・・」
川「なんだよ、少しくらい弱音はいてもいいだろ」
美「言わせてもらうけど、弱音はく前にやることとあるでしょ。」
川「・・・」
美「いい加減自分を甘やかすの止めなよ」
川「別に甘やかしてるつもりはないけど」
美「あのさ、あれだけ怒られて悔しくなの？」
佐「先輩・・・」
川「なんだよ」
美「怒られちゃった、で終わってたら、進歩なんてないんだよ」
佐「先輩、なにも今いわなくても」
美「佐倉だって私は何度も叱ってるよ。それでもこの子はそのたびに自分で考えて、自分を変えていってるよ。進歩してる。お前はどうなの？」
川「うるさいな！俺だってかんがえて
美「考えて何をしてるの？何もしてないでしょ！だからいつも同じことで怒られてる！」
川「お前になにが分かるんだよ！」
佐「先輩！少し落ち着いてくださいよ！言いすぎです」
美「いいんだよ！これだけ言ってもダメならもうやめた方がいい！これからも他人に憧れながら、嫉妬しながら生きていけばいいよ。その人の努力を知ろうともしないでね！」
川「俺だって悔しいよ！次こそはって思うよ！でもできないんだよ！自分でも痛いくらい分かってるよ・・・」
川「ほっといてくれ・・・」
美「・・・いこう、佐倉」
　去っていく美好
佐「あ、はい・・・先輩。私、ここに入ってたくさんの人に怒られて、このままじゃダメだって、大人にならなきゃって思いました。でも、スイッチを切り替えるようだいきなり大人になることはできないんだって気づきました。きっと大人になるって、難しい事なんだと思います。」
　佐倉、手に持っているバインダーを川島に渡す。
川「コレは・・・」
佐「すみません、偉そうに。何が言いたいかっていうと、がんばりましょうって事です。それでは、失礼します！」
　バインダーを受け取って去る佐倉
川「・・・ありがとう」

【公園】

　ベンチに座っている川島。春日が近寄ってくる
川「今日も開校記念日？」
春「そんなところかな。おじさんはお昼休み？」
川「俺は・・・今日はサボり」
春「そうなんだ・・・実は私も」
川「知ってたよ。この間はごめんね」
春「ううん、大丈夫。私勝手に勘違いしてたんだ。大人になったからって、何か変わるわけじゃないもん」
川「なにかあったの？」
春「学校、嫌なんだ、私。バトミントンの一地区予選のメンバーに選ばれたんだ。そしたらなんでお前が選ばれるんだって、先輩や同級生に目つけられちゃって。」

川「・・・」
春「最初は陰口だったり、嫌味言われる程度だったんだ、顧問に媚び売ったろ！とか。でも、ある日部活に出ようと思ったら、私のラケットがおられてたの。それ以来、学校には行ってないんだ。」
川「そのこと、誰かにいったの？親とか、先生とか。」
春「ううん。選抜からも外されたみたいだし、なんだか戻りづらくて」
川「そうだったんだ・・・」
春「でも気づいたんだ！歳をとったら大人になれるわけじゃないし、大人になるまで逃げ続けてちゃダメだって。」
春「だから私、今できることは全部やる！今からにげるんじゃなくて、今を変えるんだ！」
川「・・・君はすごいな」
春「ん？」
川「良く気付いたね。すごいよ。おじさんもやっと気づいたんだ。俺、まだ大人になれてなかった。だから、大人のいいところ、楽しい事に気づけてなかったんだ。」
川「だから、君が大人になったら、きっと楽しい事が待ってる。新しい世界が待ってる！君が感じた大人の世界が、君にとっての真実だ！」
春「・・・ありがとう」
川「こちらこそ、ありがとう」
春「おじさんもさ、急に変わろのは難しいから、大人の真似してみれば？」
川「真似？」
春「そう、かっこいい大人を・・・演じてみるの。ほら、元演劇部でしょ！」
川「そっか・・・そうだね！俺もかっこいい大人！演じてみるよ」
春「うん。この前あった時より、スーツ似合ってるよ！」
川「少しは近づいたかな？」
春「じゃあ、私学校行ってくる！」
川「うん、行ってらっしゃい。アバヨ！」
春日、防犯ブザーをちらつかせる
川「ごめんごめん」
春日、手を振って去る
川「ふぅ・・・よし！」
袖から美好、佐倉入ってくる
美「あ！いた！川島！」
佐「深しましたよ！」
川「あれ、何でここに」
美「バカ、電話にも出ないで。昨日のひと悶着を佐倉が司さんにチクったんだよ」
佐「チクったわけじゃないです！なにか心当たりはないかって聞かれたから」
美「それをチクったっていうの！バインダーに書いとけ！」
川「それでわざわざ・・・」
美「川島は昔っから落ち込むとこの公園にきてたの思い出してね」
佐「きっとここだって先輩が」
美「ホラ、会社戻るよ。司さんカンカンだからね」
川「マジか・・・」
佐「でも少し言い過ぎたって反省してましたよ」
川「マジか！」
美「バカ、早くいくよ！」
佐「先輩、いきましょ！」
二人 走り去る
川「ちょっと待って！」
ネクタイを締める
川「よし、行ってきます！」

終